



国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里  
代表：荒谷卓

# 日本 戦闘の 者



荒谷卓（あらや たかし）  
生年月日：昭和34年秋田県出身  
略歴：昭和53年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職(1等陸佐)。海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。  
平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。  
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会：熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める  
著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs.精鋭部隊—最強を目指せ』並木書房／『自分を強くする動かない力』三笠書房  
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス  
<https://musubinosato.jp/>

040

大規模な戦争で機能したG.I.ジョーのようなゴリラ型戦士の訓練目的は、一つの型にはめることだった。全員が一つになって一斉射撃できるまで反復訓練をさせ、兵士から主体性を奪った。『何も考えるな。命令通りに動け!』といったローマ以来の奴隷型戦士の育成が、RMA (Revolution in Military Affairs) と呼ばれる軍事革命以前の常識だった。

しかし、すでに紹介したとおり、特殊作戦は、通常作戦と違い戦闘能力の他に政治、情報、心理戦、民事等の能力も必要となる。特殊作戦を遂行するオペレーターに要求される資質は、高度の専門知識を持つスペシャリストであると同時に全体の動向を把握できるジェネラリストであること、自立した深い忠誠心と他者の心情を読み取る思いやりを併せ持つ社会のエリートで、政治も人情もわきまえた武士のような存在が手本になる。

そういう特殊作戦のオペレーターを見つけ出す選考検査が最初の課題であった。体力気力はあたりまえ。人並み以上の創造性があり、発想の転換ができ、軍事的な思考を超えて前例のないオペレーションのアイデアを企画・運営できる資質を兼ね備えた奴を探し出さなくてはならなかった。

基本的に、自衛隊ではG.I.ジョータイプの自衛官を育てているわけだから、言われたことを言われたとおりにやると評価が高い。しかし、この種の人間は、言われないと自分で考えて行動するという事はしない。自分の考えを持たず、規則通りお行儀よく立ち振る舞う。このようなタイプの自衛官は、どんなに体力・戦闘技能が高くても特殊作戦にはむかない。どちらかというと部隊では、有り余った能力を発揮できず、斜に構えて馬鹿な上司に堂々と食ってかかるようなタイプのほうが特殊作戦に向いている場合が多い。

創設当初、特殊作戦群の選考検査を受けるためには、まずもって、レンジャーと空挺の特技が条件とされた。なおかつ、体力・気力に優れた評価の高い自衛官が選考検査を受験するため全国から集まってきた。しかし、上記のような理由で30%程度しか選考検査に受からない。そうすると、師団長から直々に電話がかかってきて、「師団の中でピカイチの隊員を送ったのに、なんで不合格なんだ!」「お前のところの選考検査はどうなってんだ!」「もうお前のところにうちの隊員は二度と出さない!」と怒鳴られることもあった。本人や部隊の士気を考えればその気持ちもわかる。しかし、国家のために特殊部隊を創設するという事は、個人や部隊事情に流されず厳密に人選をしなくてはならない。そしてそれは、長い目で見れば、自衛隊全体の士気向上に必ず役に立つ。俺はそう信じて、師団長から怒鳴られようが、陸上幕僚監部から苦情を言われようが、厳密なる選考検査を実施した。



実際には、全国の部隊や機関から優秀な大隊員が選考検査を受けに来てくれたおかげで、少数ながら本当に素晴らしい隊員が集まってきた。1年間の特殊作戦課程教育と部隊の教育訓練を通じて、彼らを、目的を示したらいちいち指示されなくとも自分で発想し構想を練り行動を組み立て目的達成に向けて動ける特殊作戦のオペレーターに育てなくてはならない。

俺が最初にやったのは、彼らのマインド・リセット、常識にとらわれ、あるいは規則に縛られ自己抑制している心を開放することだった。自衛隊では、全体行動をするため、決められたことを決まった通りに繰り返すことを慣習化しているため、自分で考えて行動するという行為を自己抑制する傾向が強い。しかし、特殊作戦では、常に奇襲性が要求される。相手が考えもしない作戦行動や考えたとしても対応できないようなアイデアを要求される。したがって、今までの自衛隊での慣習を転換し、任務遂行のために創造力と柔軟性を発揮して、自分で考え行動しなくてはならない。彼らにはその資質がある。あとは、自己の才能と資質の発揚を抑制するレバーを開放すればよい。

まずは、憲法9条下の政治状況と国民の帆船意識の中で、自衛隊は戦うことはない、危険な任務に就くことはないというマインドを変えなくてはならなかった。現憲法下であっても、特殊作戦を遂行する我々は、命を捨てても任務を全うしなくてはならない事態がある、とすることを認識させるために、儀式を取り行った。任務遂行中に殉職した仲間の霊を、特戦群全員で迎えて祀る依代として、本部隊舎の正面に、鹿島神宮のお神を植樹した。作戦中に仲間が死んだら、任務遂行のため生を全うした仲間の霊を尊び、特戦群全員が死んだ仲間の思いと行動を決して忘れず、魂は永遠に共にあることを誓った。自分の死を常に身近に

全てはこの2004年3月29日、創設記念行事・隊旗授与から始まった。石破防衛庁長官(当時)から隊旗を受け取る筆者。

黒のタクティカルスーツに身を包んだ筆者。



感じ、死の恐怖から心を解放する。死の恐怖から解放されれば心は自由になる。思考の幅も突然広がる。心のマインド・リセットだ。

次に教育訓練だ。自衛隊には、訓練基準と言うものがある。個々の技術や行動毎に、何をどの程度できればよいということが規定されたものだ。例えば、小銃で300m離れた的に何発打って何点以上得点すること、といったものだ。しかし、創設時には、特殊作戦群の訓練基準は存在しなかった。かといって、一般部隊と同じ訓練基準では永遠に特殊部隊はできない。したがって、陸上幕僚監部の許可をもらい、特殊作戦群のための教育訓練の基準作りに着手した。それらはすべて、特殊作戦を実戦する上で必要とされる最低限の能力である。米留で体験してきた近接戦闘射撃を俺がまず展示した。これが、マインド・リセット。自衛隊の常識では、安全管理上絶対にやってはいけない射撃だ。少しでも間違えれば仲間の命を奪う。しかし、一般には危険なことも、特殊部隊では安全に遂行できるようにならなくてはならない。安全は自らの実力で確保するのが特殊部隊の戦士だ。訓練内容は常に死と隣り合わせだから、いい加減な訓練では本当に死んでしまう。特殊作戦を遂行するオペレーターとなるためには、今までは、訓練内容が全く違うことを認識した彼らは、思考と行動の常識という抑制を開放した。特殊作戦にタブーは存在しない。任務遂行のためあらゆるところで可能性を見出し実現していく。

射撃や爆破はもちろん、空挺団でもやっていないミリタリー・フリーフォール、海上自衛隊でもやっていないミリタリー・ウォーターボーン、通信、メディック、ブランニング、インテリジェンス等々全てにおいてこれまでの常識を崩していく。マインド・リセットと言うのは、口先や気持ちだけの事ではない。身体、技能、知識、思考、精神など心身全てにおいて変わらなくてはならないのだ。

例によって、特殊作戦群でも俺は隊員に言った。「俺に勝てるやつはいるか」。戦闘射撃、夜間山地走、武装障害走、特殊格闘、相撲等特戦群全隊員参加で戦った。「群長には負けない」「ぶっ潰す」、みんないい気合が入った。特に2年目の相撲大会は、予選組別総当たりで上位者が決勝トーナメントに進めるのだが、「群長と戦いたいので群長と同じ組に入れてくれ」と言うやつらがいっぱい申し出てきた。俺は言った。「俺と同じ組になれば、お前ら全員予選で敗退するからやめとけ」。この時は、俺は決勝まで行った。相手は元空挺団のラグビー選手。こいつは強かった。俺が負けたとき、隊員全員大喜びしたもんだ。皆いいやつらだ。

特戦群は、やるべきことがいっぱいあるから訓練時間がやたら長い。しかし、彼らは、どんなに遅くなくても、夜中に勝手にラックサックマーチや格闘訓練をする。俺も、仕事が終わると、毎日特戦群の武道場に寄って汗をかくことにしていた。そうすると、「群長。ちょっとやりませんか」と戦いを挑んでくる隊員がいつもいた。「ああ、いいよ」。打撃、グラウンド、相撲など何でもありだ。こいつらと一緒にいい汗かいて官舎に帰る。そこでまた、酒宴だ。俺の官舎には、いつだれが来ても酒を切らすような見ともないことをしないように、たらふく酒がストックしてある。部屋の壁沿いには一升瓶がずらっと並んでいた。そうして、盃を交わしながら、隊員達と一緒に『生き死に』の覚悟を語り合う。実に美味しい酒だった。特に、任務に出動す

る隊員達とは、必ず徹底して酒を飲む。これが最後になるかもしれない酒だ。その覚悟で杯を交わした。

そういえば、特戦群の隊員は、自分たち特戦群戦士の歌まで自前で作ったよ。作詞作曲特戦群戦士だ。なかなかいい歌詞なので紹介する。

## 特殊作戦群歌

- 1 日の丸にかざした剣 (つるぎ)  
今 心に誓い立ち上がる  
空を仰ぐ清く輝く瞳  
ゆるぎなき理想を求め  
巖 (いわお)の身となれ  
嗚呼  
我が流す血と汗は  
土にしみこみ未来をつくる  
正義と信義と不屈の勇氣  
世界に誇れる戦士  
我ら特戦群
- 2 金色の光の鶯が  
今この習志野に舞い降りる  
邪気を払い正義を立てて  
闇に明かりを灯しうる勇者となれ  
嗚呼  
身を捨てて心を生かす  
武勇極めたる精鋭の  
志は高く誠を貫く  
歴史に名をはす戦士  
我ら特戦群

## 世界にあふれる光 我らの力で

この歌を、特殊作戦群創設記念行事の時に全員で歌ったら、石破防衛庁長官(当時)が「自衛隊でも、遂に血を流し身を捨てる気概の部隊ができましたね」と言った。特殊作戦群隊員の覚悟を歌で察してくれた庁長官(当時)に敬服したもんだ。

2004年3月29日は、日本の戦闘者の部隊が立ち上がった記念すべき瞬間だったよ。



特殊作戦群の隊舎・隊員の前で植樹祭を司る筆者。



近接戦闘射撃を指導する筆者。

041